

おおさか  
KEY  
わーど  
第5回

# 夕涼みは大川でふかふかと

情趣あふれる三味線の音



木谷(吉岡)千種 「浄瑠璃船」 1926年 絹本着色 大阪市立近代美術館建設準備室蔵

いまでも昔も大阪の夏は暑い。現代は冷房があるが、江戸時代には、中之島界限から大川の夕涼みがあった。橋の上で川風にあたり、屋形船を出して涼をとった。夕涼みの屋形船は、連作錦絵「浪花百景」をはじめ、幕末から明治ごろの様々な絵に描かれ、“知の巨人”といわれた木村兼葎堂の「兼葎堂日記」にも、江戸から来訪した画壇の巨匠・谷文晁を歓迎するため、大川で舟遊びをした記録がある。上方落語ならば、「遊山船」「船弁慶」が大川の夕涼みを舞台とする。難波橋へ涼みにきたいいつもの二人組が、浴衣を錨の模様でそろえた屋形船を見て、「見れば綺麗な錨の模様」と声を掛けると、「風が吹いても流れんように」という下の句が返ってくるのが「遊山船」。洒落も涼やかだ。

今回は、大川の夕涼みを情趣たっぷり描いた日本画を紹介しよう。木谷千種(1895-1947)が大正15年(1926)の帝国美術院展覧会に出品した《浄瑠璃船》である。“いとさん”(お嬢さん)を乗せた屋形船の横で、熱演中の浄瑠璃の太夫と三味線を乗せた芸人の船。ヴェニスの舟歌ならぬ水上の大道芸人だ。川風で揺らぐ浄瑠璃と太棹はどんな響きだろう。“いとさん”の指も楽器を操るように動く。若い船頭の着物の柄はウナギ、手前に瓜や西瓜を売る船も浮かんで、どこか大陸的だ。

木谷千種は、北区堂島浜通の裕福な吉岡家に生まれた。洋画を学びにシアトルに留学した才媛で、大阪府立清水谷高等女学校を卒業し、絵を東京の池田蕉園、大阪の野田九浦、北野恒富に師事した。大正9年(1920)に、近松研究家の木谷蓬吟と結婚して古典芸能への造詣を深め、「八千草会」を主宰して、大阪の女性画家の育成にも活躍する。

《浄瑠璃船》にも、千種らしい工夫がなされている。屋形船の行燈にある「淀屋」の文字は、淀屋橋とも関係する豪商・淀屋辰五郎を連想させ、作品のスケールがぐっと大きくなる。また、太夫が語っている床本は、近松門左衛門の『冥途の飛脚』の「新口村」の段だ。梅川・忠兵衛と孫右衛門が雪のなかで別れて幕が下りる「新口村」だが、暑い夏の情景に冬のドラマを忍び込ませるのが巧妙である。三味線の女性の着物の柄の花びらも、まるで舞い散る雪のよう。一方、船中に伊達騒動を題材とした『伽羅先代萩』の床本を置いてあるが、乳母がわが子を犠牲にして若君を護る堅苦しい忠義の物語よりも、若い“いとさん”は悲恋モノがお好き…といった演出だろう。

最近では“水都”復活を目指し、納涼船や川床ができるなど、中之島界限もにぎやかである。千種の《浄瑠璃船》に触発され、夕涼みに出かけてみるのも、古くもまた新しい“浪華情緒”発見への道かもしれない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館教授/大学院文学研究科(兼任)。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念 木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。